

氏名	サカ 阪	イ 井	メグミ 恵
学位の種類	博士（学術）		
学位記番号	博音第180号		
学位授与年月日	平成22年3月25日		
学位論文等題目	〈論文〉〈音楽づくり〉の教育的根拠に関する研究 ―ヨイサの会の実践を手掛かりに音を聴くことについての美学的考察を踏まえて―		
論文等審査委員			
（総合主査）	東京芸術大学	教授	（音楽学部） 佐野 靖
（副査）	〃	准教授	（ 〃 ） 山下 薫子
（ 〃 ）	〃	教授	（ 〃 ） 片山 千佳子

（論文内容の要旨）

本論文は、小学校音楽科における〈音楽づくり〉の問題性・今後の可能性について論じたものである。「ヨイサの会」という教師グループが行っている、「音を聴く」ことを特に重視した〈音楽づくり〉の実践を記述し、それを手掛かりに、現象学的・美学的な知見を援用しながら〈音楽づくり〉の意義を考察している。

〈音楽づくり〉とは、既存の様式にとらわれない自由な発想で音素材を扱い、通常はグループの共同作業として行う創作活動のことである。本論文は、昨年（平成20年）改訂された小学校学習指導要領が示した、〈音楽づくり〉の扱い方に対する疑問から稿を起こした。新学習指導要領は、この活動分野では「音を構成して音楽をつくる」ことを指導するとした上、つくるべき音楽を、その形態面を強調して示したきらいがある。しかし〈音楽づくり〉の実践は過去20年あまりにわたって多様に展開している。その結果、〈音楽づくり〉を通して「子どもが何を学ぶのか」という視点は一様ではない。それらが議論の俎上に上がらないままの、学習指導要領の今次改訂の内容は、やや拙速に運ばれたように思われる。

第一章では、〈音楽づくり〉をめぐる、教師や研究者の間に異なるスタンスがあることを文献資料から読み取り、それら多様なスタンスの系譜的および概念的整理を行った。〈音楽づくり〉の導入は、学校教育における構成主義的な授業へのパラダイムシフトと合致しており、小学校現場では全体的に歓迎された。しかし同時に教師たちに対して、学校で子どもに音楽を教えるとはどのようなことか、我々は何を音楽と見なすのか、といった難問を突きつけるものでもあった。その難問を引き受け、考えながら実践を組み立ててきた研究者や教師たちが、一様でない考え方を確立していることを述べた。

第二章では、〈音楽づくり〉の導入を契機に、突きつけられた問題を真摯に受け止め、独自の〈音楽づくり〉のスタイルを確立してきた教師グループ「ヨイサの会」について、その実践概要を記した。筆者は足掛け10年にわたり、このグループの授業や研究会に参加し、現場の具体的な問題について、共に考え学んできた。彼らの〈音楽づくり〉実践は、「音を聴く」ということを特別に重視している。第三章・第四章において彼らの実践の背後にある発想と理論を読み解くための準備として、その実践を大きく2つの枠づけによって記述している。1つは、筆者が「〈環楽器〉探求」として括る、音を探求する活動である。もう1つは筆者が「〈きく・つくる〉」として括る、子どもたちが音を選び、グループ内で互いに聴き合い、生かし合う工夫の発展としての、曲づくりである。

第三章では、第二章で述べた〈環楽器〉探求の活動の意味について、ヴァルデンフェルスの身体現象学、グッドマンの芸術の記号論などを参照しながら考察した。〈環楽器〉探求は、1つには、全方位に開いた地平から音を聴き出すレッスンであり、2つには、音と音との関係性ではない音自体——広義の音色を聴くレッスンである。子どもたちは音色を、その経時的変容に沿って身体的にモーション化して聴くこと、そのような聴きかたは、あるタイプのシンボル生成の働きであることを論じた。ヨイサの会が、「感じる心を育てたい」と易しく語ることは、この活発なシンボル生成の促進である。これは明示的に教えることができないものであるが、彼らはそれを共に行うための時間と場を確保することに、腐心しているのである。

第四章では、第二章で述べた〈きく・つくる〉の活動について、アイディ、ツカーカンドル、戸澤義夫などの現象学および美学の理論を援用しながら考察した。〈環楽器〉探求の延長上にある〈きく・つくる〉は、音をよく聴くことによって、音のコミュニケーション的な性質を生かし、音本来の応答可能性に気づくことを基礎に展開するもので、いわば子どもたちの濃密な応答遊びである。ここに立ち現れる音の出来事を、ヨイサの会は「それが自分たちの音楽」と見なす。学習指導要領が、音楽を形態的に規定する傾向を示すのに対し、あくまで行為として・出来事として音楽をとらえる立場を提示している。

終章では、第四章までの流れを踏まえ、〈音楽づくり〉の投げかけた問題と、教育的可能性・根拠についてまとめた。ヨイサの会という特定の実践に即して論じた本稿では、〈音楽づくり〉を主として「聴くこと」の学習と位置づけ、①音色を聴き・感じる学習 ②聴き合って合わせることの学習 ととらえることが重要ではないか、という論点が導かれた。従前の音楽科教育にそのような視点は希薄である。しかし〈音楽づくり〉による学びは、「音楽をつくる」ことより基礎的で、すべての音楽学習の分野の根底にくるような力をはぐくむ可能性を持つのであり、それが遍く理解されていくことが重要である。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、小学校音楽専科教諭4名による「ヨイサの会」の実践を手掛かりに、小学校音楽科の創作活動である「音楽づくり」のあり方をとらえ直し、現象学的・美学的な知見を踏まえて、その新たな可能性を探ろうとするものである。本論文の意義と学術的成果は、次の3点に集約されよう。

1つは、「ヨイサの会」という、少人数ながら長年真摯に独自の実践研究を積み重ねてきているグループ活動のエッセンスを「〈環楽器〉探究」と「きく・つくる」活動という2つの枠づけで論じた点である。これによってヨイサの会の実践の音楽教育的意義が明確になり、さらには音楽づくりを根本的にとらえ直す上での貴重な視点が提供された。第2に、様々な理論的知見に依拠しつつ、原初的な活動である「聴くこと」の意味をとらえ直し、広く「音色」(音の質感)を聴くことを基盤に据えた音楽科教育のあり方を展望している点である。第3は、過去20年にわたる「創造的音楽学習」の実践及び研究の動向を明快に整理し、その多様性と問題性を鋭く指摘している点である。新学習指導要領(平成20年告知)の「音楽づくり」に対する批判的射たものであり、これからの創作活動の方向性や方法論を探究していく上で重要なポイントが示されている。

ただし、問題点も少なくない。その第1は、ヨイサの会への思い入れが強すぎて、主観的で情緒的な論述が目立つ点である。ヨイサの会の実践に対する批判的検討も不十分である。また、ヨイサの会の実践が、他の音楽活動及び学校生活全体にどのように生きて働いているかが不明確であるために、活動の検証にまで至っていない。創造的音楽学習の史的展開においても、導入された第6次学習指導要領(平成元年告示)に関連する資料への論及がなされていないのは残念である。

以上のような問題点や課題はあるが、「聴く」という原初的な活動の重要性を根拠づけながら、「音楽づくり」の問題性、ならびに新たな可能性とその課題的視点を探究した本論文は、音楽と教育の本質を

問い直そうとするスタンスで貫かれており、音楽教育研究の分野に貴重な問題提起を行うものである。課程博士の学位論文に値すると総合的に評価し、「(削除)」で合格とする。